

Mark A. Jones, *Children as Treasures: Childhood and the Middle Class in Early Twentieth Century Japan*
(『宝物としての子ども：二〇世紀初頭の日本における子ども観と中間階級』)

稲井 智義

『宝物としての子ども』(Cambridge: Harvard University Press, 2010)において著者、中央コネチカット州立大学歴史学部准教授のマーク・A・ジョーンズ(一九六九-)は、一八九〇年から一九三〇年における日本版の近代子ども観の形成と中間階級の関係を明らかにしようとしている。本書は、すでに『子ども観と若者観の歴史研究雑誌』(“Journal of the History of Childhood and Youth”, v. 4, 2, 2011)において、近代日本子ども文学研究者のL. Halliday Pielによる書評もなされており、英語圏における評価も高い。その書評でも指摘されているように、本書は英語圏の日本研究のなかで、子ども観に焦点化した初めての著作である。また、日本語圏の近代日本の子ども観の研究と比較しても、引用した史料の豊富さ、社会的文脈に関する記述の詳細さは群を抜いている。

著者、ジョーンズの主張を要約すると、「宝物としての子ども」をみる日本版の近代子ども観は、「少国民」(little citizen)と「優等生」(superior student)、そして「子どもらしい子ども」(childlike

child)という互いに競合する関係にある子どもの理念の複合体として構成されており、戦後に勝利したのは「優等生」としての子どもであった。以上の結論は、著者がフォローした二〇〇〇年までの日本語圏における子ども観の社会史研究の知見からみても、また著者がフォローしていない二〇〇〇年以降の研究蓄積からみても、きわめて妥当なものである(たとえば、小山静子『子どもたちの近代：学校教育と家庭教育』吉川弘文館、二〇〇二年の歴史像を参照)。そして、三つの要素によって日本版の近代子ども観を総括したことは、国内外を通じた本書のオリジナリティーのひとつであろう。しかし、それが要因となって、本書は一見するとそのような総括の試み(あるいは日本版の近代子ども観の教科書や通史)に過ぎないとみえてしまうところがある。それでは、さらなるオリジナリティーはどこにあるのか。

この問いは日本語圏の研究をある程度、把握し、それらの知見を自明としてきた評者にとって実に難しいと感じられるが、以下では、通史的な記述に留まらない本書のオリジナリティーが明確になるように心

がけて、本書の概要を紹介していくことにしたい。

序章「子ども観、中間階級、近代日本」では、著者は二〇世紀初頭の日本において、「子宝」(the child as treasure)という言葉がキャッチフレーズとなったという事実から日本版の近代的孩子観を解き明かしていく。子宝という言葉は、平安時代の詩人、山上憶良(六六〇?～七三三?)の詩「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及めやも」(「銀も金も、玉とても、何の役に立とう。すぐれた宝も子に及ぶことなどあろうか。」万葉集第五卷八〇二、中西進『万葉集全訳注原文付』一九八四年、三六六頁)から作られたとされるものであり、現代でも日本の子ども観を説明するときに使われることがある。しかし、著者はそうした日本人は子どもを大切にするという「神話」にくみしない。そうではなく、「子どもは宝物である」という発想が三越百貨店や『婦人世界』、児童教養研究所で使われ、新たな命が与えられたことに注目する。たとえば、親向けの雑誌を発行した児童教養研究所の設立の趣旨では、「児童は世界最貴の財宝にして、全人類の希望は懸て彼等の上にあり」とされていた(『児童』創刊号、一九一八年五月)。また、第一部を通じて、「国家の宝」や「次世代の国民」として、すなわち、「少国民」として子どもが理解されていることに着目している。日本特有と思われる「宝物としての子ども」という表現に近代的意味が付与されていくことは、本書の主張の根幹をなすものであり、ここに、ひとつの特徴を見出すことができる。

また、著者は一九九〇年から一九三〇年における日本版の近代的孩子観の形成を、制度や集団、個人に注目して明らかにしていく。これらの大人を「子ども観の設計者」(architects of childhood)と独自に呼んでおり、各章では、児童心理学者、家族改良者、小児科医、百

貨店経営幹部、書籍と雑誌の編集者、国家官僚、児童文学者、学校の教師、親に注目する。なぜなら、「子ども観の設計者」が(本書では四歳から一二歳までの)子ども観の理念だけでなく、(幼年、児童、子供と呼称された)子どもの実際の日常生活を作り直したからである。本論は一九九〇年から一九一〇年までの明治後半を扱う第一部と、一九一〇年以降の第二部によって構成されている。第一部「明治後半の中間階級の出現…家族改良者、科学の専門家、賢母、少国民」(第一章から第三章)では、家族改良者、科学の専門家、よく教育された女性といった新しいエリートに注目して、家族や女性との関係から子どもの位置づけの変化を跡付けている。

第一章「道徳と物質…家族改良者と中間階級の推進」では、主に社会学者が検討してきた日本における近代家族の形成の問題と関わって、クリスチャンと社会主義者に代表されるエリートによって語られた新しい家族の規範を検討する。彼らが規範とした家族像は、一家団欒や家庭として表現される感情による結合を重視し、家政を管理する家族であった。そして著者は、日本の都市で新しく勃興した家族こそが「中間階級、道徳と物質の関係性、宝物としての子ども」という理念を再定義する争いの中心にいた」とまとめている。

第二章「公的専門職と中間階級…社会への影響に向けた科学の専門家の冒険」では、公的専門職(児童心理学者、小児科医、師範学校教授)の勃興に注目する。彼らは、子どもの専門家の利益となる市場を形成することによって、高学歴の母親と強固に結びつく。そして、彼女たちは専門家によって不可欠とされた科学的知識を習得し、子ども中心の育児をするようになった。しかし、著者によれば、その育児は実際には、専門家中心の育児に過ぎなかった。

第三章「賢母と少国民・中間階級の確立」では、日本女性史研究が明らかにしてきた良妻賢母に導かれながら、ジェンダーと階級の相互作用を明らかにしようとする。賢母たちは、子どもの成長日記をつけ、子ども部屋やお弁当を用意する道徳的で科学的な育児を通じて、日本の少国民の強い道徳と健康な身体の涵養に努めたのである。

第一部の各章にわたる特徴は、序章でも言及されている階級の問題を、家族と関連付けようと試みた点にある。たとえば、近年邦訳されたステッドマン・ジョーンズ『階級という言語・イングリッド労働者階級の政治社会史1831-1989年』（長谷川貴彦訳、刀水書房、二〇一〇年）などの研究を参照して、階級の概念の存在を前提とするのではなく、歴史的なアクターが人々や実践を正確に述べるために、それぞれの階級概念をどのように用いたのかに留意している。ただ、その成果については、評者の力量不足のため、これ以上、明示できない。

第二部「大正期の日本における中間階級の再形成・教育、遊び、新しい子ども期の構想」（第四章から第五章）では、「少国民」としての子ども観に対抗して、マス・メディアと小学校によって奨励された「優等生」、そして、両者の子ども観への批判として児童心理学者や進歩主義的教育者、児童文学者によって出された「子どもらしい子ども」という二つの子ども観が形成される過程を示している。

第四章「自己形成した女性と優等生・超越する女性性、教育達成、能力主義の近代」では、教育社会学者の天野郁夫や広田照幸らに代表される一九八〇年以降の教育の社会史研究に依拠しながら（近年では、木村涼子『主婦』の誕生・婦人雑誌と女性たちの近代）吉川弘文館、二〇一〇年が重要）、能力主義社会における女性と子どもの関係を検討する。『少年世界』や『小学校六年生』といった子ども向け雑誌に

おいて語られた「誰でも優等生になれる」という約束によって、女子教育を受けて自己形成した女性（self-made woman）が、子どもを通じてさらなる社会上昇の夢を見るようになった。そして、子どもたちが中学校入学試験に向けて、子ども部屋でも勉強するようになる一方で、母親たちは子どもを試験地獄から回避させ、痛みなく教育を成功させるために、早教育や胎教へも関心を寄せていった。

第五章「子どもらしい子ども・遊び、そして余暇の重要性」では、ロマン主義の子ども観についての包括的な検討がなされている。これまで玩具や遊び空間、子どもの読み物については個別に検討されてきたが、著者はそれらを総括し、またあまり検討されていなかった空間や物にも注目する。幼稚園から公園、遊び場、動物園、図書館のなかの児童室にわたる子どもが遊ぶための空間と、玩具や児童雑誌、童謡、童話という遊ぶ物によって、子どもらしい子どもの世界は創造された。しかし、著者は皮肉なことに、このように形成されたロマン主義の子ども観が「近代世界を批判したとしても、決してそれを作り直すことはなかった」と結論づけている。

特に第二部では、小学校入学以降の子ども期だけでなく、明確に幼児期を位置づけたことは本書の特徴であろう。近年では、教育社会学者の小針誠が『お受験』の社会史・都市新中間層と私立小学校』（二〇〇九年、世織書房）において、ジョーンズが検討していない私立小学校の入学試験が幼稚園や家庭教育に与えた影響と機能を検討しているように、幼児期を明確に位置づける子ども観の研究が展開され始めている。本書も、こうした研究と歩みを同じくしているのである。

エピローグでは、一九三〇年以降の戦時期から戦後の日本の歴史を教育制度の普及や展開、マス・メディアにおける子どもや家族の表現

から素描して、子どもと大人の関係性の変化、そして後述するその再構成の条件について言及している。

以上、各章の紹介を通じて、いくらか本書の特徴が明らかになったと思われる。ただし一点だけ、本書の全体に関わる特徴を付け加えておきたい。それは、ジョーンズの研究は日本語圏の研究者にはあまり知られていない、英語圏における豊富な日本研究のうえになされているということである。この点については、本稿の冒頭で紹介した書評においても、ジャバノロジストのキャロル・グラックとハリー・ハルトゥーニアン¹の学術的伝統にあると指摘されている。さらに、一九九〇年代以降の日本研究でも、女性や家族、子どもが対象にされるようになっており、本書もこうした系譜のなかにある。一例をあげれば、「国家のイデオロギー装置」(ルイ・アルチュセール)としての「お弁当」に注目した戦後日本についての研究があり、ジョーンズは第三章において、その起源が二〇世紀初頭にあると指摘している。

最後に、本書を閉じたとき、今一度、目を落とすことになる唯一の図像を眺めておくことにしたい(国立国会図書館国際子ども図書館「絵本ギャラリー」でも閲覧可)。表紙に使われたその図像は、戦前期に活躍した児童画家、岡本帰一(一八八八―一九三〇)の「ボクノヘヤ」(『コードモノクニ』一九三〇年一月、創刊は一九二二年一月)という作品である。勉強机に向かった少年が中央にいる「ボクノヘヤ」は、床から棚、屋上まで部屋一面に、積木、人形、車や飛行機の模型といった遊び道具に満ち溢れた「子どもらしい子ども」の姿を示しているようにみえる。しかし、少し注意深くみるならば、部屋の主である少年が、学校の宿題と推測される象の写生をしていることに気づくであろう(絵の右端には、「ボクノヘヤデクニオサンノシ

ヤセイ」という説明がある)。つまり、この少年は「子どもらしい子ども」だけでなく、「優等生」も意味している。しかしながら、この絵の含意はそれだけではない。壁には、騎乗しながら敬礼した軍人の絵と日の丸を持つ頬の赤い男の子の絵が飾られているように、この作品には、巧妙に「少国民」としての子どもも観も投影されている。つまり、この作品は、互いに競合する三つの子どもも観が同時に共棲できることを示唆している(異なる子どもも観の共存については、広田照幸『日本人のしつけは衰退したか…「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書、一九九九年も参照)。そして、このような日本版の近代的孩子も観の帰結について、著者は序章で、子どもにとっての子どもの時代は「宝物」ではなく、「子どもは実際には犠牲者であった」と指摘している。さらにこの歴史的な悲劇に対する応答として、エピソードでは、「子どもと大人の歴史が絡み合わせられるときのみ、子どもと大人の未来の運命は共有されるであろう」と結んでいる。

本書のような総括がなされたにもかかわらず、日本の子どもも観と子どもの歴史研究には、依然として、関係づけるべき「大人の歴史」に関する課題が多く残されていると評者には感じられる(たとえば、この分野でも十分な蓄積がないと思われる天皇制や戦争に関して、評者の目に留まったものとして、加藤陽子『昭和天皇と戦争の世紀』講談社、二〇一一年を参照)。さらには、歴史学や社会学といったアプローチに加えて、東アジアやグローバルな世界における研究対象となされる必要があろう。その積み重ねによる新しい子どもも観と子どもの歴史と、さらなる研究へといざなう本書には、「子どもと大人の未来の運命」を共有するための歴史的な手がかりが隠されているのではないだろうか。